

家庭に図書館を

『小学生全集』がやってきた

和田 敦彦

1 『小学生全集』を取り巻く出版状況

一九二七（昭和二）年に配本の始まった『小学生全集』は、一九二九（昭和四）年、総巻数八八巻の形で刊行が完了する。執筆、編集にあたった菊池寛は「本全集は、最初巨額の広告費を使つたに比し、会員は少数で経営は頗る困難でありました」とその終巻に際して記している。児童向けの豊富なコンテンツを盛り込んだこの全集発行は、大規模で多様な広報、販売戦略の中で華々しく始まり、学術、教育領域とも関係しあいながら流通してゆく。この全集は当時、そしてその後、どのような役割や意味をもったのだろうか。それを明かすには様々なアプローチが可能だが、ここでは、この『小学生全集』を、それを受容した出版、読書環境の中でとらえてみたい。中でも注目したいのが、この時期の図書館、あるいは児童図書館の存在だ。大正の初期から『小学生全集』の刊行される昭和の初期までは、「戦前における図書館活動の最盛期」と位置づけられてもおり、図書館の児童室や児童図書館の設置、活動をめぐる動きも活発な時期である。このいわば

児童図書館の位相や思想が、この全集の作成や受容の背景には色濃く見えてくる。とはいえ、ただその事実関係を確認するのみではなく、大量出版、消費へ、という出版環境の転換期の中、この全集の宿しているいわば「家庭に図書館を」とも言うべき思考の意義や可能性、限界もまた考えることができ、と思う。

以下、論の概略を示しておきたい。まず、『小学生全集』刊行時期の出版環境について述べる。この時期は、先にもふれたように、出版状況が激変する時期にあたり、それを抜きにしてこの時期の読書環境はとらえがたい。大規模で投機的な商業出版が盛んになされる一方で、この時期の出版事業、特に児童向け図書出版は、教育事業、あるいは公共的事業としての色合いも強く帯びている。それについて、『小学生全集』を手がかりに、詳しく見てゆきたい。そうする中で、この全集の企画や受容の時期に重なりあつてうかがひあがつてくる、図書館とのかかわりやその意味について考えていきたい。さて、まずはこの時期の出版環境だが、それについては、まずいわゆる円本の流行現象にふれておくべきだろう。当時

の経済状況は、一九二〇（大正九）年の金融恐慌に端を発した世界的な不況の中、大正十一年には更なる金融恐慌にみまわられており、雑誌販売によって利益をあげていた出版業界も、大正末には「完全に不況に飲み込まれ、書籍、雑誌ともに返品が激増³⁾」していた。厳しい経営のもとにあった改造社は、『現代日本文学全集』全二五巻を、一冊一円という触れ込みで購入予約者、予約金を募集する。この企画が成功し、二三十万部の予約者を獲得、円本ブームの火付け役となった。これを皮切りに各出版社が全集や叢書を類似の方式で企画、大規模な新聞広告やビラ撒布といった宣伝合戦を伴いながら、数十万部単位での出版、流通活動が展開されることとなり、その数はこの五年間で三百数十種にのぼったという⁴⁾。また、こうした大量の印刷、販売に対応して、輪転機や給紙機といった大規模なインフラの刷新も進んでいく⁵⁾。

興文社から出版される『小学生全集』もまた、これら円本全集中の一つに数えられるが、同時期にアルス社が企画していた児童向けの全集『日本児童文庫』との間で確執、広報合戦が展開されることとなった。「聞くところによると、「小学生全集」の宣伝費は五十万円、「日本児童文庫」の宣伝費は三、四十万円⁶⁾」といった言葉が残されているが、予約販売の締め切りとなる一九二七（昭和二）年の五月から六月にかけて、全国紙、地方紙を含めた多くの宣伝広告が見られる。類似企画であったうえに、後発の『小学生全集』が宣伝にあた

って用いた文部大臣推薦の有無をはじめとした文言が、やがては訴訟にまでなる。この対立、宣伝にあたっての両社の過大な経済的負担は、全集発行の負担ともなっていた。

これまでも、『東京朝日新聞』を中心とした両社の広報合戦はいくどか論じられてきたが、『読売新聞』や地方紙にも同様の広告や記事を見て取ることができる。ここでは一例として、長野県の『信濃毎日新聞』を見てみるが、北原白秋が『小学生全集』に向けての批判を展開した「満天下の正義に訴ふ」を、『読売新聞』に五月二五日に掲載すると、その三日後には同じ記事が『信濃毎日新聞』に掲載される。また、それに対する菊池寛側からの応酬も、やはり三日後れで同様の記事が掲載されている。記事ばかりではなく、広報企画も全国規模で展開されてもいた。『小学生全集』は、広報の一環として東京では小学生全集発行記念小学生大会を企画し、童話、童謡遊技、活動写真を用いた会を各地で催しているが、同様の企画は長野、および上田でも実施され、それが地方紙を通して広報されてもいる。あるいは、『小学生全集』において、予約者を対象とした懸賞や奨学金を設けて購入者を募る企画もまた、大規模な一面広告として『信濃毎日新聞』に数日後れで掲載されている。

このように全国規模で大規模な全集予約者の募集、宣伝活動が展開し、受容する地域や読者層に応じて購買力の違いはありながらも、その流通範囲は各地に及んでいる。広告文に

は数百万、数千円といった過大な数値が用いられ、のぼりや広告、ビラの散布やアドバルーンといった広告ツールはもちろん、読者、購買者を巻き込んだ各種企画は、何かのための広告というより、それ自体が新たな価値や感覚、欲望を作り上げてゆくイベントと化してゆく。

注目したいのは円本企画において、読者は購買者、消費者としてのみ巻き込まれるのではなく、しばしば生産者、出資者としてそこに取り込まれていくという点である。読者が全集を予約する予約金は、刊行、そして定期的に配本をしていく上での重要な運転資金となる。したがって出版社は、価値ある全集を刊行する事業の賛助者、支援者として、読者を積極的に意味づけ、広報活動に利用していく。特に児童教育にかかわる『小学生全集』や『日本児童文庫』ではこの傾向は顕著にあらわれている。営利性と、教育上の「国家的使命の遂行」⁽¹⁰⁾とが密接に関係し合うわけである。

先に言及した北原白秋と菊池寛のやりとりでも、やはりこの児童向け全集発行の営利性、商業性が争点となっているが、児童や教育といった領域をそれらと対立するものとしてとらえるべきではあるまい。それらがまさしく相互に依存、強化しあう読書環境が、メディア環境の大規模な変化とともに生まみ出されていることをとらえるべきだろう。

これら出版事業を社会への貢献といった面からとらえ、両者の広報活動のさらなる共通点にも注意を向けるとき、「図

書館」イメージの活用がそこに見えてくる。完結性や体系的性をもった図書館イメージが宣伝の中で効果的に用いられてもいるという特徴である。『小学生全集』は広報コピーでも「児童用の一大図書館」であることをうたい、「日本児童文庫」もまた、「模範的児童文庫」、「立派な児童文庫図書館が出来ます」といった文句と共に、全集の整然と並んだ写真を積極的に活用する。こうしたイメージを用いる方法は同時期の改造社の『現代日本文学全集』や春陽堂の『明治日本文学全集』にも共通しており、両者は書棚の無料進呈をうたって視覚的に書棚写真を広報に用いている点でも共通している。

出版事業の営利性、商業性と、児童教育という領域のどのような交点に『小学生全集』が位置しているのか。それをより具体的に次に検討してみたい。その後、ここで述べた図書館イメージとの関係をとらえることとする。

2 『小学生全集』と教育との間で

先に述べたように、『小学生全集』は、積極的に教育領域と関係し合っていた。それは販売や広告戦略としても、また、むろん各巻の編集方針や書き方といった内容レベルにおいても見て取ることができる。

当時の教育雑誌においても「アルスの日本児童文庫対興文社の小学生全集に於ける教育者の争奪戦」をあげながら、巨額の出版資本が、教育者の判断や立場に神経を使わねばなら

ないという状況が指摘されているが、両全集共に、広報には推薦者や編者として、大学や教育関係者の名前を前面に押し出している。例えば五月二日付けの『読売新聞』の広告では『日本児童文庫』を推挙する前文部官僚や学校長一一七名を挙げ、さらにそのリストは「以下次号」として広告が続いていく体裁にさえなっている。だからこそまた「小学生全集」が広報に用いた文部大臣の推薦の有無が、両者の訴訟にまで発展することとなるのである。

『小学生全集』を全体として検討するとき、こうした広報レベルだけではなく、内容の水準でも、教育領域をかなり意識しながら各巻が編集されていることは容易に見てとれる。例えば『日本一周旅行』の巻では、教科書で扱われている日本各地の地理情報が乏しいことをあげて、日常的な知からそれを把握する編集方針がなされているし、『日本童謡集』では、編集にあたった西条八十が、小学校の唱歌教育を批判しながら、児童教育への積極的な役割を「はしがき」で強調している。あるいは、この全集の編集を進めつつ「我が日本の小学生は、教科書以外に六十有余巻の知識を得た」と位置づける編集部「愛読者の皆様へ」の文言からもそれはうかがえる。こうした編集にあたっての意識には、文芸春秋社が『小学生全集』に先立って刊行し、広報にあたって『小学生全集』の姉妹編と位置づけられていた『小学童話読本』の意味も大きいだろう。「少年時代の読物は、その人の一生を支

配するといはれてある」という児童の読書に対する意識を背景に、学年ごとの副読本として作られたこの集の発行事業は、菊池寛にとっても、自身が児童に向けた教育、出版事業に適任であるという自負を抱かせるものであった。

『小学生全集』は教育を補完することを重要な柱としており、そのことが独自の出版戦略にもつながっている。全集を「上級用」「初級用」と分かち、小学校低学年用の片仮名や平仮名ばかりの巻を設けて分売も可能とすることで、単なる児童読者ではなく、さらに「低学年層」という読者層を積極的に開拓していくわけである。

この全集はまた、その販売にあたって、実際の事業として教育を経済的に補完していく役割をも担っていた。奨学金の提供がそれである。「此全集に予約することは皆さんのお友達の中で学資のない方を救ふことにもなります」として、もともとは、小学校に在学する全集予約者の中から毎年一五〇名に、三年間で総額一万八千円の額を提供するという企画だった。奨学金は、年額一二〇円を一三名に六〇円を二三名に、という規模の縮小を見せるが、実際に支給もなされている。この企画は、学校からの推薦、月収や家族構成といった家族情報を求めることで成り立っており、編集サイドが学校や家庭と連携した事業として全集刊行を行っていることがうかがえよう。『小学生全集』が学校や家庭との連携を重視していたことは、愛読者名簿の掲載や、読者との通信欄からも

うかがえる。愛読者名簿には、全国各地の学校名が見られるが、そこでは読者とやりとり、さらには読者から読者への呼びかけが盛んに掲載され、あたかも定期刊行の教育雑誌のような様相を呈している^①。読者との、あるいは読者同士のコミユニケーションを生み出しながら家庭や教育領域との接点が積極的に生み出されていたことがうかがえる。

では『小学生全集』における「教育」とはどのような内実をもったものなのだろうか。それを簡単にまとめることは難しいが、ある種の実践性を具えた知を作り上げるところにあったのではないか。実社会や実際の経済活動につながるものとしての「教育」であり、学校教育と実社会とをつなぎとめるものとして『小学生全集』は制作されている側面がある。それは、実際に生きる地理的空間を身につけるものとして、学校教育を補完しようとしている先の『日本一周旅行』に見ることができる。あるいは「小学生諸君が社会へ出た！」そしてその日から一人一人が各自科学のことをよく知った役に立つ有益な人であるとしたら如何でせう」として、実社会に出たときの様々な生活の知恵を集めた『子供技師』。そして、実社会での経済活動へ誘う立志的ストーリーで展開する『世の中への道』もその典型である。また、だからこそそれと相反するような夢想的な物語、例えば『アリス物語』を収録する際には「はしがき」や「後書き」に「かうしたのも、本全集に、是非一冊だけは収録する」といった、言い訳めい

た言辭が見られるのだろう。

『小学生全集』は、児童が幼少期に読む読物の重要性を説き、それらを体系的で充実した形で提供する環境が必要であることを説く。そしてこうした読書環境が、学校や家庭から社会に至る通路として意味づけられる。この時期のこうした思考の背景をとらえるには、この時期の図書館、あるいは児童図書館をめぐる思考やイメージが欠かせない。

3 児童図書館という思想から

大正からこの昭和の初期にいたる時期が戦前の図書館活動の最盛期にあたることは先にもふれた。一九二二（大正十一）年には、全国規模の図書館調査がなされるが、それによれば全国の国公立図書館数は一六四〇館に及ぶ。とはいえ、平均冊数にして二七〇〇冊、実際には一〇〇〇冊未満の図書館が六割を占める状況ではあった^②。こうした中で児童図書館はそのサービスの重要な一部として位置づけられている。日比谷図書館に勤め、この時期の図書館学で重要な位置を占める今沢慈海は「児童室或は児童図書館を開設し、児童に対して積極的作業を為すべし」とは、近世図書館思想中最も重要^③として盛んにその意義を説いているし、同じく市立図書館に勤務しつつ児童図書を選択や学校と図書館の連携について数多くの論を展開する竹内善作の活動も同様である^④。

この時点では、東京においては、日比谷、深川、一橋、新

京橋図書館の四館にはすでに児童室が設置されている⁽²¹⁾。特に日比谷図書館は児童を含めた館外貸出を積極的に展開し、児童用図書の日録である『児童読物』を作成、発行している。この時期の児童用図書目録としては、大阪市立図書館の『児童図書目録』、外地でも台湾総督府図書館で作成した『選定児童用図書目録』（いずれも一九二八年）等、大規模な図書館では整備が進められていることがうかがえる⁽²²⁾。大規模な図書館ばかりではなく、各地の図書館で児童文庫や朗読、お話し会といった児童向けサービスが盛んになっていることはこの時期の『図書館雑誌』をはじめとした記事類からもうかがえる。また、学校図書館史においても、大正自由教育の実践校が「たいていの場合、学校や教室に児童文庫や自学室」を設けていく点が指摘されている⁽²³⁾。

そうした中、やはり児童期の読書の重要性があわせて語られてもいる。竹内善作にしても、幼年期における書物の影響の重要性を説いて、「幼年期、即ち四歳から十歳の間⁽²⁴⁾」が最も読み物の印象を受けるとしており、先の菊池寛の児童期読書に対する認識と共通していよう。また、一方の『日本児童文庫』の企画に実際にたずさわった土田杏村においても「整然と組織せられた児童図書館、或は児童文庫といふ様なものが出来て居なくてはならない」という教育思想がその背景にはあった⁽²⁵⁾。

実質的に整備されつつあった、そしてまたその必要性が

イメージとして語られていた「児童図書館」は、『小学生全集』を欲しがる、必要とする読者側の思考自体を作り出していく。図書館のように、整然と並んだ多数の書棚を見ると自体が、そしてそれを所有することが満足感を与えてくれる。「五十巻揃つたら、本ダンスをと、のへてと、今から楽しんでいたして居ります」（和歌山県日方町柳愛子⁽²⁶⁾）あるいは、「僕の本棚は小全でいっぱいになりました」（奈良市森田亮一）、「もう本棚に二十九冊の小全がならびました。実に愉快でたまりません」（大阪市砂田忠夫⁽²⁷⁾）といった児童読者達の声からは、そうした書籍の享受感覚が見て取れよう。

こうした文脈の中で、家庭に図書館（書齋）を作るべき、という発想もなされている。内田魯庵は、日本の家庭が「ライブラリーレス」であることを述べて、その必要性を述べている⁽²⁸⁾。図書館関係商社の草分けである間宮不二雄が「ホームライブラリー」の必要性を述べて機材を提供するものもこの時期のことである⁽²⁹⁾。

『小学生全集』の広告コピーの一つに「出世の贈り物に」という文言があるが、実践的な知を身につけ、社会に出てゆく階梯として、「図書館」を所有する必要性と願望とが生み出されていく⁽³⁰⁾。それは、秩序だった知の競争原理へと児童を練り込むとともに、小さな消費者⇌読者として読者が馴致されていく過程ともなる。図書館イメージは、そこに存在する一つの装置として機能したと言っていいだろう。図書館を

家庭で所有する、それは、教育の階梯を登って上昇していくための安全装置を家に備えるようなものである。同時にまた、大正期を通しての図書館への関心は、国民教化の有効な手段として、文部官僚による社会教育の施策ともつながっていることも重要だ。⁽⁴⁾

しかしながら、この時期の各地の図書館動きからは、そうした個々人の上昇志向や欲望とは異なる可能性もうかがえることに注意すべきだろう。大正期はまた、「労働者の組織の中に図書館や文庫を作る動き」が全国化した時期でもあった。農民文庫や労働文庫といった図書館の大衆化が同時進行してもいた。⁽⁵⁾そこでは、読者個人へのサービスとして完結する場ではなく、各種イベントや交流の場としての可能性も考えられている。和田萬吉は「地方文化の中心としての図書館」で、個人を教育する役割とは別に、「民衆の集會に適するやうにし、談話會、講演會、幻燈會、活動映画會等を催す」場としての図書館を求めている。⁽⁶⁾

『小学生全集』を生産、受容する枠組みにおいては、どちらかといえば家庭の中で所有される個人のための完結した図書館イメージが当初は強く作用していたと言えるだろう。とはいえ、そのことはこの全集がそのようにのみ家庭で受容されたことを意味しない。やってきた『小学生全集』を皆で集まって読む場が生まれていたかもしれないし、家庭におかれることで複数世代にまたがる読者間の対話を生み出したかも

しれない。その可能性は、円本をはじめとして、それらが実際にどう読まれ、用いられたか、といった次元での調査、議論の中で明らかになっていくのではないだろうか。

〈付記〉本稿は、『小学生全集』を対象とした研究会（小学生全集研究会）での調査をもととしたものである。全集内容についての踏み込んだ議論については、同会メンバーによる『小学生全集の世界観』（島村輝、久米依子、藤本恵、宮川健郎、和田敦彦『日本近代文学』七八号、二〇〇八・五）をご参照頂きたい。

注

- (1) 菊池寛「あとがき」『修養絵本』（興文社、文芸春秋社、一九二九・一〇）
- (2) 佐藤政孝『図書館発達史』（みずうみ書房、一九八六・三、二五〇頁）。
- (3) 鈴木敏夫『出版 好不況下興亡の一世紀』（出版ニュース社、一九七〇・七）。
- (4) 橋本求『日本出版販売史』（講談社、一九六四・一）。
- (5) 鈴木敏夫、前掲書。
- (6) 小川菊松『出版興亡五十年』（誠文堂新光社、一九五三・八）。
- (7) 『東京朝日新聞』における両者の広報活動についての詳細は高島健一郎「円本」の新聞広告に関する一考察「円本ブーム」形成期の昭和二年を中心に」（『日本出版史料』一〇号、二〇〇五・一〇）、早川麻里「日本児童文庫」の成立とその時代

背景」(『日本児童文学』二五号、一九九三・三)が言及している。

(8) 北原白秋「滿天下正義に訴ふ」(『読売新聞』一九二七年五月二五日、及び『信濃毎日新聞』同年五月二八日)。

(9) 永嶺重敏『モダン都市の読書空間』(日本エディタースクール出版部、二〇〇一・三)は、実際の購買意欲や購買能力は都市と地域に大きな差があったことを指摘する。

(10) 『小学生全集』の広告において、棚橋絢子「国家的立場からの刊行を喜ぶ」(『読売新聞』一九二七年六月一日)、また、同広告で田辺八重子「実質に於ける好資料」も「国家的事業に賛意」の言辞を寄せている。

(11) 畠山花城「出版界と教育界」(『教育時論』一九二七・四・二五)。畠山は当時帝国大学図書館司書にあった。

(12) 小学生全集編集部『日本一周旅行』(興文社、文芸春秋社、一九二九・七)、西条八十「はしがき」(『日本童話集初級用』興文社、文芸春秋社、一九二七・六)。

(13) 「愛読者の皆様へ」(『外国文芸童話集 上巻』興文社、文芸春秋社、一九二八・一二)

(14) 菊池寛「待て! 而して見よ」(『読売新聞』一九二七・五・二八)。

(15) 「謹告」(『読売新聞』一九二七・五・一三)。

(16) 菊池寛「奨学資金について」(『外国文芸童話集 上巻』興文社、文芸春秋社、一九二八・一二)。

(17) 改造社の『現代日本文学全集』においても、こうした月刊誌的な特徴が指摘されている(山岸郁子「フィルムの中の作家たち」『文学』一〇〇(一))。

(18) 文部省普通学務局『全国図書館に関する調査』(文部省普通学務局、一九二二・一〇)。

(19) 今沢慈海『図書館経営の理論及実際』(叢文閣、一九二六・九、四九〇頁)。また、今沢はそれまでも『児童図書館の研究』(博文館、一九一八・二)でそれに先行して論を展開している。

(20) 竹内善作「児童読物の標準」(『図書館雑誌』一九二四・五)。
(21) 佐藤政孝、前掲書。

(22) 大阪市立図書館『児童図書目録』(一九二八・四)、台湾総督府図書館内台湾図書館協会『選定児童用図書目録』(一九二九・一)、東京私立日比谷図書館『児童読物』(一九二七・七、一九二五年より毎年刊行)。

(23) 塩見昇『日本学校図書館史』(全国学校図書館協議会、一九八六・六、五八頁)。

(24) 竹内善作「児童図書館員の資格」(『図書館雑誌』一九二四・一〇)。

(25) 土田杏村「教育界の流行を論ず」(『教育研究』二七七、一九二四・九)。

(26) 「おたより」(『少年立志伝・少年少女美談』興文社、文芸春秋社、一九二八・一〇)。

(27) 「愛読者通信」(岸田久吉・内田恵太郎『魚の世界・獣の世界』興文社、文芸春秋社、一九二八・九)。

(28) 内田魯庵「読書に就て」(『図書館雑誌』七三号、一九二五・十一)。

(29) 間宮不二雄「家庭文庫の必要」(『図書館雑誌』八六号、一九二七・一)。同年一月一〇日にラジオ放送した話をまとめたも

- の。
- (30) こうした全集と室内空間の問題に言及したものに、早川麻里(前掲)の他、塩原亜紀『所蔵される書物』(『国語研究』二〇〇号、二〇〇二・三)がある。
- (31) この点については山梨あや『近代日本における読書と社会教育』(法政大学出版局、二〇一・二)。
- (32) 石井敦『日本近代公共図書館史の研究』(日本図書館協会、一九七二・二)。
- (33) 和田萬吉『地方文化の中心としての図書館』(『図書館雑誌』六一号、一九二四・九)。

(わだ・あつひこ／早稲田大学)